

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 筑波学院大学

1 事業の趣旨・目的

- ・ つくば市内の小中学校で対応できる日本語指導者(日本語ボランティア)を養成する。
- ・ 日本語支援が必要な児童生徒の母語に対応できる外国人日本語指導者を養成する。
- ・ 市内小中学校日本語指導担当者とのネットワークを構築する。
- ・ 市内日本語教育機関・日本語指導者・関係諸団体のネットワークの強化を行う。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
6月11日	筑波学院大学 2209 教室	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、金久保、亀田 計 8 名	① 市内小中学校の外国人児童生徒に対する日本語指導の現状の把握 ② 日本語指導者養成講座の実施について ③ 関係諸団体のネットワーク化について ④ 担当者の決定	議事録資料① 参照
9月10日	筑波学院大学 2209 教室	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、石田、金久保、亀田 計 9 名	① 養成講座のふりかえり ② 市内中学校外国人生徒の事例研究 ③ 日本語指導者特別養成講座の実施について	議事録資料② 参照
2月5日	筑波学院大学 2209 教室	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、金久保、亀田、渡辺 計 9 名	① 日本語指導者特別養成講座の実施について ② 養成講座の様子 問題点と改善案 ③ 関係諸団体のネットワーク構築に向けて	議事録資料③ 参照

【写真】



2月5日企画委員会

第一回 学区における子どものための日本語指導者養成 会議議事録

実施日時	平成 21 年 6 月 11 日 14 時 30 分 - 16 時 00 分		
実施場所	筑波学院大学 2209 教室	記載者	馬場 裕
出席者	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、金久保、亀田、		
配布物	・養成講座資料「日本語支援が必要な児童・生徒たち」 ・取り出し授業参加スケジュール案 ・多文化共生事例集 ・年間計画書案		
議題	① 市内小中学校の外国人児童生徒に対する日本語指導の現状の把握 ② 日本語指導者養成講座の実施について ③ 関係諸団体のネットワーク化について ④ 担当者の決定		
議事	① 市内小中学校の外国人児童生徒に対する日本語指導の現状の把握 2008 年度のつくば市外国人児童生徒の人数の確認、支援体制、ボランティア活動の 情報確認・共有 ② 日本語指導者養成講座の実施について 業務期間、業務目的の確認 ・ つくば市内小中学校で対応できる日本語指導者の養成 ・ 日本語支援が必要な児童の母語に対応できる外国人日本語指導者を養成する ③ 関係諸団体のネットワーク化について ・ 市内小中学校日本語指導担当者のネットワークを構築する ・ 市内日本語教育機関・日本語指導者・関係諸団体のネットワークを強化する ④ 担当者の決定 運営委員会・・・金久保、西村 講座の実施・・・金久保、山崎 現場見学・・・根本、吉田 広報・・・馬場 報告書作成・・・金久保、亀田 ⑤ その他 消耗品、参考図書購入の確認 コピー用紙、USB・・・イセブ DV テープ、IC レコーダー・・・美津野商事 参考図書・・・		
備考			
次回会議予定	平成 21 年 9 月 10 日		

第二回 学区における子どものための日本語指導者養成 会議議事録

実施日時	平成 21 年 9 月 10 日 14 時 30 分 － 16 時 00 分		
実施場所	筑波学院大学 2209 教室	記 載 者	馬場 裕
出席者	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、金久保、亀田、石田、		
配布物	・ 前回議事録 ・ 養成講座配布資料 ・ 外国人生徒取り出し授業案 ・ 日本語支援についてのお願い		
議 題	⑤ 養成講座のふりかえり ⑥ 市内中学校外国人生徒の事例研究 ⑦ 日本語指導者特別養成講座の実施について		
議 事	① 養成講座のふりかえり 参加者ふりかえりシートから報告 参加者の様子、参加者同士の良好な関係作りについて 参加者の興味と事例の選択について ② 市内中学校外国人生徒の事例研究 つくば市内中学校取り出し授業への参加を実践演習として講座取り入れる 日程、参加人数等について中学校と調整を行う 授業計画を作成する ③ 日本語指導者特別養成講座の実施について 2 月のはじめに特別講座を開催する 筑波学院大学公開講座「日本語教育入門」と連携し、共通したテーマを設定 具体的な講座の形態・内容について検討を行う 参加者の募集、広報機関への連絡を行う		
備 考			
次回会議予定	平成 22 年 2 月 5 日		

第三回 学区における子どものための日本語指導者養成 会議議事録

実施日時	平成 22 年 2 月 5 日 15 時 30 分 － 17 時 00 分		
実施場所	筑波学院大学 2209 教室	記載者	馬場 裕
出席者	西村、根本、大木、吉田、山崎、馬場、金久保、亀田、渡辺、		
配布物	・ 前回議事録 ・ 特別養成講座実施要項 ・ 特別養成講座案内らし ・ 特別養成講座配布資料 ・ 養成講座参加者フィードバック用紙		
議題	⑧ 日本語指導者特別養成講座の実施について ⑨ 養成講座の様子 問題点と改善案 ⑩ 関係諸団体のネットワーク構築に向けて		
議事	① 日本語指導者特別養成講座の実施について 日程・講師・内容の確認 ・ 2 月 24 日：午前 吉田麻子 外国人児童生徒への日本語指導の実践的な試み・活動現場紹介～つくば市の事例～ ・ 2 月 24 日：午後 金久保紀子 外国人児童生徒をめぐる問題～地域・学校のこれからの対応～ ・ 2 月 25 日：午前 西村よしみ 日本語教育現場の指導者の役割～子どもへの足場かけ～ ・ 2 月 25 日：午後 亀田千里 日本語教育現場のための言語学入門 特別公開講座運営の担当者決定 参加者アンケートの項目検討 ② 養成講座の様子 問題点と改善案 上級養成講座の設置の必要性について 講座対象者を広げる 定期的な講座開催に向けて ③ 関係諸団体のネットワーク構築に向けて つくば市国際交流協会、つくばインターナショナルグループ（TIG）との連携を軸として、それぞれがフレキシブルに活動できるようなゆるいネットワークを構築する 最新の情報・状態を調査する機関としても機能し、情報共有を行う		
次回会議予定	平成 年 月 日		

3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名

つくば市小中学校日本語支援者養成講座「日本語支援が必要な児童・生徒たち」
子どものための日本語指導者養成講座 特別公開講座

(2) 養成講座の目標

- ・広く日本語支援が必要な児童・生徒の現状を理解する。
- ・参加者自身にできそうなことが何であるのかを掴む。
- ・養成講座を通して仲間をつくり、支援者の輪を広げる。

(3) 受講者の総数 52 人

(4) 開催時間数(回数) 15 時間 (6 回)

(5) 参加対象者

- ・外国人児童生徒との関わりのある方
- ・外国人児童生徒の日本語指導に携っている方
- ・外国人児童生徒の日本語指導に興味のある方
- ・外国人の方の参加可能（日常的な日本語能力は必要）
- ・大学生以上

(6) 受講者の募集方法

つくば市日本語支援ボランティアネットワーク「つくばインターナショナルグループ(TIG)」を
通じて周知・募集

つくば市国際交流協会 つくばサイエンスインフォメーションセンター内要項掲示

つくば市 N 小学校教職員・PTA の希望者に対して参加募集

特別公開講座ポスター、ちらし作成、配布

※特別公開講座ポスター添付

(7) 研修会場

- ・つくば市内 N 小学校
- ・つくば市立 N 中学校
- ・筑波学院大学

(8) 使用した教材・リソース

つくば市外国人児童生徒数統計データ

つくば市外国人児童生徒実体調査データ

自主作成教材

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
6月17日 15:30～ 18:00	日本語支援が必要な 児童生徒について知 る、社会的な現状を 理解する	筑波大学大学院人文社 会研究科教授 西村 よしみ	11名
6月24日 16:30～ 19:00	どんな支援ができる のか、実際にはどう 教えるのかを考える	つくば市立並木小学校校 長 根本 光子	9名
7月1日 15:30～ 18:00	市内小学校で学習支 援活動をしている団 体の方からお話を 聞く	外国人児童生徒学習支 援ボランティア 風の会 代表 吉田 麻子	11名
9月16日 13:30～ 16:00	学習支援現場研修 つくば市内中学校取 り出し授業への参加	つくば市立並木小学校校 長 根本 光子	11名
2月24日 10:00～ 14:30	子どものための日本 語指導者養成 特別 公開講座(1)	外国人児童生徒学習支 援ボランティア 風の会 代表 吉田 麻子 筑波学院大学准教授 金久保 紀子	36名
2月25日 10:00～ 14:30	子どものための日本 語指導者養成 特別 公開講座(2)	筑波大学大学院人文社 会研究科教授 西村 よしみ 筑波学院大学講師 亀田 千里	36名



2月24日 子どものための日本語指導者養成 特別公開講座(1) 吉田 麻子氏



2月25日 子どものための日本語指導者養成 特別公開講座(2) 西村よしみ氏

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

アンケート概要

調査目的： 講座受講者の子どもの日本語教育についての興味・問題意識を尋ね、受講したことによって変化したことや、理解が深まったことを明らかにする。また、受講者各々の活動の現況を尋ね、今後の連携に繋げることを目的とする。

調査時期： 平成 22 年 2 月 24 日・25 日 子どものための日本語指導者特別公開講にて

調査対象： 特別公開講座受講者 36 名（34 名から回収）

調査方法： 選択式・記述式の質問紙票による調査

調査内容： ①性別・年齢 ②受講したきっかけ ③講座内容の評価 ④興味・問題意識

調査結果：

◆講座内容について以下の項目を 5 段階で評価してください。(5:評価高い 1:評価低い)

- ・ 講座の内容はわかりやすかった 4.1 (Ave.)
- ・ 講座の内容はテーマに対して適切であった 4.1 (Ave.)
- ・ 受講者の人数・教室の広さは適切であった 4.1 (Ave.)
- ・ 講座の内容は自分の興味・関心に合っていた 4.1 (Ave.)
- ・ 受講時間は適切であった 4.2 (Ave.)

◆どのようなことに興味・問題意識があり、当講座を受講しましたか。

<ボランティア>

- ・日本語指導のボランティアに興味があったから
- ・小学生のボランティアを始めたところで壁に当たってしまったから
- ・学校のボランティアをしているので参考にしたいから
- ・ボランティアで日本語を教える活動を始めたところであったので興味があった

<子どもへの日本語教育法>

- ・子どもの日本語教育
- ・小学生への日本語教育指導方法について
- ・子供のための日本語教育の基本を知りたかった
- ・子どもへの日本語教育法のスキルを高める
- ・子どもと大人の日本語教育の違いに興味があった。

<事例・実践>

- ・日本語教育の支援・事例
- ・現場での事例

- ・実践的な工夫やテクニックについて知りたかった
- ・日本語教育、外国人児童生徒への教育と実情
- ・子どもに対しての向き合い方、問題の対処の方法を学びたい
- ・実際の指導をするにあたって、役に立つ情報、勉強ができればと思った
- ・日本語指導をするにあたり、いろいろな知識を吸収したかった

<仕事・活動>

- ・参加している日本語教室に子どもが参加しているので興味があった
- ・日本語をブラジル人の子どもに教える仕事をしていて興味があった
- ・今後子どもの日本語指導に関わる機会があると思い受講した
- ・手話活動をしていて、その事に役に立つと考えた

<生活>

- ・つくば学区地区に住んでいて身近な話題であったから
- ・子供がハーフで教育問題に直面したため
- ・自分も小学校のときに英国の小学校で言語や友人関係で苦労したから
- ・外国の生活で助けられたことがあったから
- ・ホームステイの受け入れをしていて言語に興味を持った

- ・日本語をもっと深く知りたいと考えた。
- ・入門ということで軽い気持ちで受講した

◆ 当講座受講後に興味・問題意識にどのような変化がありましたか。

- ・それぞれの個人の状況によって必要な日本語の形があるということを再認識した
- ・個人の状況に合わせて教えていくことが必要であると感じた
- ・ケーススタディーを考えていくべきだと思った
- ・集中力がない児童についての対応方法
- ・児童生徒に関しては、当人だけでなく、親の問題、存在も大きく関わっているのだと感じた
- ・子ども本人だけでなく、取り巻く環境、家族、友人によっても変わってしまう
- ・母語を持たないと考えることが出来ないということが衝撃的であった
- ・母語の重要性、日本語をよく聞きよく考えることを強く意識すること
- ・生活言語、学習言語、それぞれを意識し考える
- ・生活言語だけでなく、学習言語を身に付ける子ども達の負担は大きく、きめ細かいサポートが必要であると感じた
- ・外国人児童生徒が日本語が話せるから大丈夫と周囲に思われがちだが、実はそうではないということ

- ・早い時期の対応が必要だと考えさせられた
- ・自分に目の前で起こっていることは、社会全体の問題であると感じた
- ・行政で制度をつくるべき。ボランティア任せでは問題が多すぎる
- ・つくばの外国人に対する日本語教育の実態を知ることができた
- ・教科学習に対しての意識が変わった
- ・逃げずに取り組もうと思った
- ・もっと日本語指導の勉強をしてみたい
- ・受講した内容を早速参考にしたい
- ・難しさがわかった
- ・学習者の卒啄の機に気が付けたらと思った
- ・思った以上に深刻で考えさせられた
- ・文化の違いについて知らなかったことを知ることができた

◆ 特に理解が深まったことがあればご記入ください

- ・今まで以上に外国の方が日常的な面に入り込んでくるということ
- ・子供は本人の意思に関係なく日本に来ていること学習言語と生活言語
- ・ボランティアの活動や努力が思っていた以上にあった
- ・このような難しい問題をボランティア任せにしているのだろうか
- ・「今や口や手を出すしかない状況」に置かれているという言葉が心に残った
- ・外国人児童生徒の言語に関わる様々な問題
- ・外国人をめぐる日本語の状況
- ・外国へつながる児童生徒の現状と環境
- ・母語の大切さ、学習言語の難しさ
- ・母語が重要であることがわかった
- ・教科学習や言語習得に認知の発達が大きく関わっていること
- ・日本語教育の現状と問題点について理解できた
- ・子どもへの接し方、学習言語の扱い方について
- ・子どもの日本語から成人の日本語へと日本語も変化して成長しなければならないこと
- ・子どもと大人の指導の相違点
- ・言葉というのは断片的ではなく、使われる場面で学ぶ必要がある。
- ・場面に応じた使い方を教えること
- ・日本語を自分自身で意識すること
- ・自分自身の日本語についてもっと学びが必要だと感じた
- ・自分自身の日本語をもっと意識して使おうと思った
- ・責任の重さを考えるともっと深く勉強する必要性を感じた

- ・子どもにとっては相談できる人や場所が少なすぎる。
- ・学校に行っていない子どもがいると初めて知った
- ・今まで意識していなかったことを整理できた
- ・ゆとり教育がどのような影響を及ぼすのか

◆ 疑問点・わからなかったことをご記入ください

- ・問題への具体的な対応
- ・日本語と母語のバランス、教科学習について
- ・専門的な言葉が多いときは難しいと感じた
- ・5年後10年後の子どもへの日本語教育について
- ・これから自分になにができるのか

◆ 今後、児童生徒の日本語教育に携っていきたいとお考えですか。また、どのような形で関わっていきたいとお考えですか。

- ・地域でのボランティア活動
- ・現在行っているボランティア活動に繋がりたい
- ・ボランティアだけではなく、給料の発生する仕事となるほうがいい
- ・子供会等の行事の企画
- ・子どもに対しての指導は楽しいかと思っていたら、大人より大変だと思った
- ・関わらなくてはいけない状況だが、できれば関わりたくない

◆ 児童生徒の日本語支援に対して地域はどのような支援ができると感じていますか

- ・息の長いサポートが必要、教員退職者などを活用する。
- ・子どもの悩みなどを聞く相談所など、オープンな場所を作ること
- ・日本の文化的な事も外国人児童生徒に紹介していく
- ・地域として児童生徒、保護者に対して、日本の学校文化を教えていけるような体制をつくる
- ・言語センターを学校に設ける
- ・学校に特別クラスを設け、段階的に学級に入れていく
- ・家庭同士で子供を遊ばせるような仕組みがあったらいいと思う
- ・幅広い世代が参加する地域の行事などを作る
- ・個人で実行に移すには、ちょっとしたことで大変な努力や困難が伴うと思う。国や行政の支援が必要
- ・具体的な情報がないので参加のしようがないと感じている

② 実施主体からの研修内容結果評価

今回の研修・講座の結果を大まかに捉えてみると、内容・分量ともに社会や地域のニーズにあっていたと考えられる。特に、子どもの日本語とその支援・指導という観点において、その難しさや大人の指導との違いに着目した研修が、つくば市では、また茨城県全体を見渡してみても多くなかった。したがって、今回の研修・講座の存在の意義は大きかった。

研修の形態としては、前半をつくば市内の、特に外国人児童の在籍の多い小学校を研修場所に設定し、指導に携っている先生方からお話を聞いたり、実際に学校現場で起きている事例を検討し、意見交換を行うという実践的な内容とした。後半は、研修場所を筑波学院大学に移し、前半の研修内容と成果を踏まえながら、学術的な視点から問題を捉えなおすことを目的とした内容とした。

昨今、外国人児童生徒をめぐるさまざまな問題が浮き彫りになってくる中で、指導現場では、指導者の経験や感覚だけではその問題の対応が難しくなっていることが指摘されている。大学機関と地域社会がミクロのレベルにおいて、いかに協働が図れるのかという課題に対して、ひとつの結果が出せたのではないだろうか。指導者だけではなくボランティアの方々も手さぐりで支援・指導を行っている状況であり、大学がその人的リソースを利用して、知識・理論的な背景を発信したり、また新しい視点を支援者の方に提示する重要性はますます高まっていくと考えられる。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

研修・講座の継続の必要性は感じられるが、一方で、モデルとなる事例を育て、その内容を発信していく。また、常に最新の地域社会の状態・情報を把握する調査機関としても大学が機能する必要性がある。

茨城県南地域には、一般の方向けの集中的な日本語教育機関がなかった。本学では2010年4月から国際別科を設置し、1年間の中級レベルの日本語教育を行う。また、学習者のニーズにあった履修を支援するため、別科の科目等履修生のシステムを作り、科目ごとの履修が出来るようにする。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

本学が実施している公開講座「日本語教育入門」において共通のテーマを設定し、幅広く問題の共有を図った。

つくば市国際交流協会が主催し、本学が後援して、実施している「日本語で話そう、つくばチャレンジ」と連携し、研修を通して交流のあった、また問題を抱えている外国人児童生徒、

保護者の方々の社会参加の機会提供を行った。

外国人児童生徒の学習支援ボランティアのネットワークであるつくば国際ナショナルグループ(TIG)との情報交換、また学術的な情報提供とネットワークの活性化という点においてコーディネーター的な役割を担っている。

② 研修後の人材活用

講座に参加した方の連絡先をデータベース化して、今後の講座、イベント等への参加を呼びかける。また実際に外国人児童生徒の指導・支援活動している方からの相談に対応し、アドバイスをしていくと同時に、それぞれの指導現場が大学を通してつながり、必要としている人的リソースの紹介やコーディネートを行う。

学校の課題は社会全体の課題であり、それぞれの地域の課題である。シチズンシップを重視し、コミュニティレベルで問題解決に取り組むような意識を育むことを目的とする。

(12) 今後の課題

・上級養成講座への接続

本研修・講座は、“子どもに対しての日本語指導”に特化したことに大きな意義があった。子どもの日本語指導について、社会生活的な側面からの対応の必要性和有効性が、地域社会に認知されていくことに繋がって機会を提供できたのではないだろうか。

今後の課題は、そのような地域社会の認知と、具体的な活動をいかに結び付けていくのかということに設定できる。

考えられる対応としては上級養成講座の設置である。今回の研修・講座でも、個人レベルでの対応が難しい事例がいくつか発表され、子どもの日本語指導の問題の複雑化が浮き彫りとなった。現状においては、日本語指導者自身への援助、メンタルケアも必要となってきた。日本語指導者をはじめ、日本語指導に関わる人たちが孤立することのないように、情報交換やアドバイスを共有できるようなネットワークの形成が望ましい。事例研究やワークショップを中心とする上級養成講座を定期的で開催し、それを発信していくことで、つくば市の横断的なネットワークの形成に繋がっていききたい。

・地域社会との連携

本研修・講座では、前半の研修場所を小学校とした。そのことで、普段あまり学校に関わることのなかった地域の方々の目を学校に向けていただくことに繋がった。外国人児童生徒の問題のみならず、学校現場でおきている問題を、地域社会の問題と捉え解決していくためには、幅広い年齢層の地域住民の方の協力が欠かせない。今後もより多くの小中学校の協力をお願いし、学校が地域社会に開かれる機会となるような研修・講座を設置していきたい。